新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた研修会の実施 オンライン研修会について

大　西　孝　志[1), 2)]

2020年（令和2年）は新型コロナウイルス感染症対策が求められ、全ての学校において教育活動が制限されることとなった。3月2日から春休みまでは政府から全ての小・中学校、高等学校及び特別支援学校への休校要請、さらに4月の緊急事態宣言発令後は休校が続き、その期間が幾度か延長され、子どもたちには自宅での学習や生活が求められることになった。また、学校が再開してからも、感染症対策を踏まえた新しい生活様式下での教育活動が行われている。

一方、教員等に対する研修も同様に、これまでとは異なった開催方法が求められることになった。初任者研修、経験者研修等の悉皆研修、教員免許更新制における免許状更新講習や免許法認定講習、そして専門性向上のための様々な研修会が従前のような対面方式では行うことができなくなった。そこで、急速に利用が進んだものが、受講者が同じ場に集まることなく研修することが可能なオンラインによる研修会である。

本稿では、今年度、筆者が行ったオンライン研修会の実践報告をするとともに、受講者からのアンケート等を踏まえた私見を述べたいと思う。

キーワード：新型コロナウイルス感染症対策、ICT活用、オンライン、オンデマンド

1．はじめに

2020年（令和2年）は、我が国において急速にオンライン授業・研修が普及した年である。しかし、残念なことにこれを強く後押ししたのは、新型コロナウイルス感染症対策のため三密を避けるという理由によるものであった。教室に集まることを避ける、大きな声で話をしない、口角泡を飛ばすような議論を活発に行う研修はもってのほかということである。日常生活においても「個食」「黙食」なる、会わない・話さないという奇妙なことが推奨されるようになった。

教職員の専門性向上のための対面式の研修会や学会などは、不要不急に該当するととらえ

1）東北福祉大学教育学部教育学科
2）東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究室

られ軒並み中止を余儀なくされることになった。そこで、筆者の場合は研究室で、パソコン画面に向かって話をしたり、動画の撮影や編集を行ったりして、それをアップロードして見てもらうことに費やす時間が大幅に増えた。

教職員の研修開催については、初任者研修などの悉皆研修、特別支援学校教諭等の免許法認定講習など、実施しなければならない必要至急に該当するものが多い。そのため、準備が間に合わない春先の研修会を除いては、オンラインの活用に切り替えて研修会を開催するところが徐々に増えてきた。

私が教員になった昭和の終わりとは異なり、近年はインターネットを使ったことがない、パソコンの操作方法を全く知らない、キーボードによる文字入力ができないという教職員はほとんどおらず、複雑な操作を必要としないオンライン研修であれば、誰もが参加できるという環境もこの度のオンライン研修の開催を支える要因となった。

オンライン研修とは、いわゆる通信教育も含むことになるが、本稿では、インターネット回線を使用した以下二つの方法をオンラインによる研修とする。

同時双方向型（テレビ会議方式等）

受講者が同時にテレビ会議システム（ZoomやMeet等）にアクセスし、リアルタイムかつ双方向に授業を受ける形態

オンデマンド型（インターネット配信方式等）

受講者がオンライン上の指定されたページにアクセスし、講師がアップロードしておいた資料（テキスト、プリント、講義を録画した動画、ホームページへのリンクなど）で個別に学び、講師が提示した課題に取り組む形態

筆者はこれまでも、動画配信による研修会を担当した経験がある。1度目は教育委員会に勤務していた頃（平成16年）、北海道内の11年目の教諭を対象とした10年経験者研修（現：中堅教諭等資質向上研修）でのオンデマンド動画研修である。当時は教育センターのスタジオでカメラに向かって画面のスライド資料を説明するだけの動画であった。同時双方向という方式は一般の学校では不可能であり、受講者からの反応（質問や感想）を全く想定しない動画配信であった。10年経験者研修は悉皆研修であったため、学校のパソコン室で確実に受講していることを管理職に確認・報告してもらうという形態で、参加者からは大変不評だったことを覚えている。

2度目は現在も行っている手話通訳者を対象とした研修会である。この研修会は、対面での研修を収録したものを編集して、後日全国の手話通訳者に見てもらう方式であるため、私にとっては対面研修と変わらず、動画を視聴した受講者とのやり取りは全くない。

従って、オンラインで直接やり取りも行う形態での研修は、今年度、コロナ禍で初めて経験することになった。本稿では今年度実施したオンライン研修の概要と課題、そして受講者

のアンケートから新しい生活様式下における研修会の在り方について考えてみたい。

2. オンライン研修

今年度、表1のとおり14回のオンライン研修を行った。14番目の手話通訳者現任研修（遠隔地研修）を除き、全てが、年度途中になってから新型コロナウイルス感染症対策のためにオンライン開催に変更となったものである。この他、開催時期が早かった研修において、担当者、受講者側のオンラインの環境の整備やコンテンツの準備が間に合わずに、開催方法を資料配布型に変更して行ったものもある。そのような研修会も2021年度（令和3年度）は、配信準備等が整い、オンラインによる開催が決定している。

表1　2020年度に行ったオンライン研修会

	研修会	形態	システム
1	A県教育センター聴覚障がい教育研修（6月）	Zoom・オンデマンド	Zoom・クラウド使用
2	B県教育委員会免許認定講習（8月）	Meet・オンデマンド	クラウド使用・メール
3	C県聴覚支援学校校内研修（9月）	Meet・オンデマンド	Meet・クラウド使用
4	D地区（6県）聾学校長会夏季研修（9月）一部対面	Zoom・オンデマンド	Zoom・クラウド使用・DVD
5	E聴覚支援学校校内研修（10月）	動画映像視聴	DVD（校内サーバー）
6	C県聴覚障害教育担当者研修会(10月)	Meet・オンデマンド	Meet・クラウド使用
7	F県内聴覚支援学校研修会（10月）一部対面	Zoom	Zoom
8	G地区（6県）聴覚障害教育研究会（11月）	Meet・オンデマンド	Meet・クラウド使用
9	H市手話通訳者養成講座理論講座（11月）	Zoom・オンデマンド	Zoom・クラウド使用
10	Ｉ県聴覚支援学校公開授業研究会（12月）	Zoom・オンデマンド	Zoom・クラウド使用
11	Ｊ県教育委員会免許認定講習（12月）	Zoom・オンデマンド	Zoom・クラウド使用
12	Ｋ県教育委員会授業力向上研修（冬期）	Meet（予備）	Meet（予備）
13	聴覚支援学校全国オンライン研究会（2月）	Meet・オンデマンド	Meet・クラウド使用・DVD
14	手話通訳者現任研修（遠隔地研修）通年	オンデマンド	専用サイト

新しい形での研修会の開催は、移動時間と旅費を必要としない、気軽に参加できるという点で、新型コロナウイルス感染症対策が必要なくなったあとも、教職員の専門性向上のために行われることになると思われる。

今年度、筆者が行った、オンライン研修についてその形態及び実施して感じたことを以下に述べていくこととする。

（1）同時双方向型

同時双方向型研修にはZoomやMeetを利用して互いの顔を見て、画面の資料を共有して研修を行う方法がある。現在、多くの個人用PCにカメラやマイクが内蔵されており、以前

のようにテレビ会議はスタジオがなければ開催できないというようなハードルはなくなった。Zoom、LINEビデオ電話、FaceTime等を使った「オンライン飲み会」などの普及が同時双方向会議システムを多くの人に知らせる一翼を担った。互いの顔を見ながら、意見交換ができるこのシステムを活用した研修会は、コロナ禍において大変重宝した。

一方、この方式による研修会は、双方のインターネット環境によっては、安定的な配信が確保できず研修会が中断するという問題がある。

パソコン画面を通した一方的な講義は単調になりやすく、それを解消するために、やり取りを行う、意見を求める、反応してもらう、小グループで話し合ってもらうなどの活動を多く取り入れる。また、資料や動画を画面共有し、できるだけ対面の研修会と同じような流れを準備する。ところが、多くの要素を組み入れるほど、それらの切り替えがスムーズにいかず、配信が止まってしまう等の不具合が生じることになる。個人間のビデオ電話では気にならなかった不具合が生じるのである。

また、回線の問題が解消されたとしても、受講者のオンライン研修の技量によって参加に支障が出る場合がある。現在は、オンラインであっても受講者同士が少人数で話し合いを行うグループワーク（Meetであればブレイクアウトルーム、ミーティングルームを複数設置）が可能になった。しかし、それをうまく活用するには受講者がある程度操作に慣れている必要がある。

全員がシステムを使いこなすためには、事前に通信・接続テストを何度か企画し、それへの参加を求めることが必要である。ただし、研修会の前段で多くの時間を要することは、個人受講者の研修会への参加のハードルを高くすることになる。

また、研修時間内に同時双方向型システムの操作方法の説明をする場合は、その研修会の目的が、特別支援教育や聴覚障害教育の専門性向上なのか、パソコン操作技術の習得なのか不明確になってしまう。従って、同時双方向型システムに一番慣れていない受講者が参加できる進め方で研修会を行う必要がある。

免許法認定講習等の資格に関係する研修会では、2日間15時間程度の出席時間が厳格に決められている。PCの前に座ってはいたが、回線不具合で視聴・参加できなかったということは許されない。また、日々行われる（大学等の）授業とは異なり、専門性向上のための研修会については、回線がつながらなかったから、日を変えて、再度実施するということは受講者、講師の予定を踏まえると現実的には困難であり、確実に研修会を実施できる体制を整えることが重要である。

（2）オンデマンド型

オンデマンド型の研修は、動画をWebサイトに掲載して、それを受講者に見てもらうと

いう方式である。一方、その動画をどのような形でインターネット上に置くのかということが問題となる。大学であれば、学内のサーバ（外部の者は一切接続できない）に動画がおかれ、視聴することを認められた者だけがそれを見ることができるように設定される。

ところが、教員を対象とした研修会の場合、参加者が特に複数の県等にまたがる場合には、動画を置くWebサイトの設定が必要になる（参加者が県内に限定される場合には、教育委員会や教育センターのサーバを利用させてもらうことも可能）。

今年度、筆者が行った研修会では、受講者の勤務する学校の設置者が複数ということが多かったため、クラウド（Googleドライブ）上に作成した動画をアップロードして視聴してもらう方法をとった。

ところが、自治体によってはクラウド上のデータにはアクセスができないようセキュリティ制限がかけられていることが多い。本学がある宮城県の特別支援学校でも、クラウド経由で配信動画を見ることはできない。どうしても、勤務時間内にクラウド上のデータを見る研修を行うのであれば、個人のPC（タブレット・スマホ）とモバイルルーターが必要になる。ただし、学校では個人のPCの持ち込みが禁止になっているため、その形での視聴は難しかった。

クラウドを介さず、大学webページやYouTubeに動画をアップロードして視聴してもらう方法もあるが、誰もがアクセスできる設定の動画公開となると、個人情報保護、著作権の問題等のハードルを高くする必要が出てくる。これがオンデマンド研修を行う際の問題であった。

一方、動画を使用するオンデマンド型研修には、事前に情報保障（字幕）を付けられるという利点がある。受講者に聴覚に障害がある人がいる場合のみならず、説明の中に難しい言葉（「読話（どくわ）」「鼻濁音（びだくおん）」「口声模倣（こうせいもほう）」等）が出てくる場合、聴覚に障害がない者であっても「字幕があってわかりやすかった」という感想がみられた。対面授業の時にもこのような言葉は板書することが必要だと実感した。

また、動画による研修の場合、通信環境が整わずインターネットによる視聴が難しい場合でも、動画データをDVD等で郵送して見てもらうことも可能である。表1の5の聴覚支援学校校内研修は、研修開催の時点（10月）ではオンライン研修を行うネット回線・セキュリティの設定等の問題が解消せず、データの郵送による校内研修となった。現在は、それらの問題は解決し、学校としてオンライン研修が可能となっている。

（3）同時双方向オンデマンド型併用

現職教員対象の免許法認定講習では研修が長時間にわたるため、どのような方法をとったとしても集中力が途切れる。対面式の研修であれば、指文字の練習、難聴者の聞こえの疑似

体験、聴覚障害を扱ったドラマの視聴、聴覚特別支援学校用の教科書を班ごとに見せるなど、説明一辺倒ではなく、参加者同士の話し合いや活動を盛り込んだ研修形態をとることができるが、同時双方向型及びオンデマンド型のどちらか一方だけでは講義にメリハリを付けることが難しい。先に述べたブレイクアウトルームの設定等によるグループワークは、参加者全員がその使用のためのノウハウを持っていることが前提となる。

また、たとえ講義時間が短かったとしても、見るもの、聞くものが講師によって決められている時間が継続するため、集中力が途切れやすい。そこで、筆者は、同時双方向型（ZoomやMeet）のみ、オンデマンド型のみの研修会を極力避け、両者を組み合わせた形態での研修会を心がけた。

研修テーマに関連した15分程度の短い動画（表2）を作成し、それをクラウド（Googleドライブ）上にアップロードしておき、受講者がその動画を自分で時間配分を考え視聴できる講義割を行った。

表2　研修会用の動画コンテンツ（一例）

動画タイトル	内容
特殊教育から特別支援教育へ	特殊教育から特別支援教育への転換、養護学校義務制など
言語概念の形成1～4	言語概念とは何か具体例を挙げて説明
音韻表象の形成1～2	音韻表象とはなにか具体例を挙げて説明
聴覚障害と読話	読話とは何か具体例を挙げて説明
特殊音節1（促音）	難聴児への指導困難な促音、その理由、教科書の記載
特殊音節2（長音）	難聴児への指導困難な長音、その理由、教科書の記載
特殊音節3（拗音「は/を/へ」）	難聴児への指導困難な拗音等、その理由、教科書の記載
指文字の説明	指文字の説明・由来・覚え方・表示方法
点字の仕組み	点字の説明・表示方法、覚え方
聴覚障害者教育史	古川太四郎・髙橋潔・大曽根源助・ヘレンケラー

この際、この動画の視聴時間は受講者に一任することにした。表3のように、通常の15分間の休憩、60分の昼食の時間を休憩45分、昼食90分等とあえて長く設定し、受講者に自分のペースに合わせて、短い研修用動画を見てもらうようにした。研修会によっては、それらの動画を1，2週間前から視聴可能にしておき、実際の同時双方向型の研修時間を通常の半分程度（45分～60分）に設定することも試みた。自宅で参加した参加者に感想を聞くと、「食事をしながら30分間動画を見て、残り60分は画面から離れた」「通常の研修同様動画を30分見て昼食休憩を60分とした」「動画は分割して見た」等、自分のペースに会わせ

て研修を受けていた。また、長い休憩時間に視聴した動画についての質問を、同時双方向型の時間になってから取り上げることも可能であった。

この方式は同時双方向型システム（ZoomやMeet）で動画を画面共有する必要がなく、研修中の接続不良などがおきにくい。インターネット回線が良好な受講者は、画面上で共有された動画を問題なく見られるが、通信環境が悪い受講者の場合、動画が止まる、画面がフリーズするという理由で受講が中断することになる。このような場合、併用型のオンライン研修は受講者にとても有効な方法であった。

また、動画を数日前から見られるように設定しておき、研修会当日は受講者がそれを視聴していることを前提として話を進めると、研修会当日の時間短縮を図ることができる。受講者が会議室などに密集する時間を極力抑えるという視点では、同時双方向型・オンデマンド型の併用は、コロナ禍における新しい研修会の方法であるともいえる。

表3　免許認定講習　通常の対面式と同様の日程（上）と同時双方向型・オンデマンド型併用の日程（下）

	9:00　10:30		10:45　12:15		13:15　14:45		15:00　16:30
1日目	講義・演習 同時双方向	休憩	講義・演習 同時双方向	昼食	講義・演習 同時双方向	休憩	講義・演習 同時双方向

	9:00　10:15		11:00　12:00		13:30　14:30		15:15　16:30
1日目	講義・演習 同時双方向	休憩 動画視聴	講義・演習 同時双方向	昼食 動画視聴	講義・演習 同時双方向	休憩 動画視聴	講義・演習 同時双方向

3. 画面共有について

オンライン研修の同時双方向型では画面共有という方式で講師が受講者と同一の資料を見ることが多い。この際、共有される資料はプレゼンテーションソフトのスライド、PDFファイル、時には先にも述べた動画等、PC画面に表示されているいろいろなものを共有することになる。ところがZoomやMeetを使って画面共有を行うと、受講者側のインターネット環境、発信者側のインターネット環境によって、回線が遮断若しくは極度に遅くなってしまうことがある。

筆者の場合も、今年度は、研修会本番に備えての事前の通信・接続テストで、画面が映らなくなってしまうことがあった。当初、大学は光回線であり、接続の速度が低減することはないと高を括っていたが、学生のオンライン授業が本格的に始まりアクセスが集中する時間

（例えば4時間目が始まる時間など）には通信速度が極度に落ちて、外部の研修会につながりにくくなることがあった（現在システムの補強でその状況は改善されている）。

文部科学省高等教育課大学振興課事務連絡（令和2年5月22日）では、国立情報学研究所が主催する「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」において公表された「データダイエットへの協力のお願い」への協力が求められ、通信量に配慮した授業・研修会の実施・設計が必要となった。

そこで、筆者が行ったオンライン研修でもデータ量を軽くするために、基本的にスライドデータ・動画データを画面共有しない方法で研修会を実施した。以下にその手順を示す。

(1) 研修会前にスライドデータを相手方に送り、印刷して手元で見ることができるようにしてもらう。相手側が大人数で参加する場合には、現地のパソコンにパワーポイント及び動画等のデータを準備し、それを投影できるようにしておく。

(2) 大人数で受講する場合にはプロジェクター等を2台（A・B）用意する。

(3) 当日、スライドや動画（図1）は、ZoomやMeetにつないだPC以外のPC（A）を使ってプロジェクター等で上映する。このPCはインターネットに接続しておく必要はない。

(4) ZoomやMeetのカメラとして使用するPC（B）では、画面共有をせず、主として筆者の映像と音声を上映（図2）する。

図1　相手校のプロジェクター（A）に映る画像

図２　相手校のプロジェクター（B）に映るオンライン画面

(5) 研修会場にいるパソコン担当者は、筆者の指示またはオンラインの画面（図2）右下のスライドに合わせて、もう一つのモニタのスライドを送ったり、動画を上映したりする。画面右下のモニタは筆者の部屋のモニタ画面に実際のスライドを表示しているものである。受講者がZoomやMeet外面で見ると小さく映像は不鮮明であるが、使われているスライドを確認するきっかけとなる。

この方式で配信した場合、画面の切り替え、画面共有、動画の共有等の操作は必要なく、回線に負担を掛けることは少ない。オンライン研修の場合、回線の状況による不具合の心配はなくならないものの、画面共有などデータ量を多くする送信を避けるといった工夫をすることで、途切れのない講義配信を行うことが可能となった。

4. 受講者アンケートにみるオンライン研修

(1) アンケートを実施した研修会

今年度4つのオンライン研修において受講者アンケートを実施した（表4）。免許認定講習以外の研修会については参加者の特定が難しく人数が確認できなかった。これはZoomやMeetの映像を体育館等の大型モニタに接続し、集団で視聴しているため、パソコンの接続数と受講者が一致していなかったり、近隣の難聴特別支援学級担当者が参加していたりしたため、参加者が特定できないからである。表4の4の聴覚支援学校全国オンライン研修会は、受講者総数は会場校の対面受講者も含めると約590名であったが、学校として接続し、それを広い会場で集団視聴し、アンケートは接続担当者による回答が多く、回収率は不明である。アンケートはGoogleフォームを使って行った。

表4　アンケートを実施した研修会とオンライン研修の受講経験

		受講者	開催時期	オンライン研修受講 初めて	経験あり	回収率
1	Ｂ県教育委員会免許認定講習 特別支援教育総論（初めて取得）	37名	8月	56%	44%	78%
2	Ｃ県聴覚支援学校校内研修 校外難聴特別支援学校参加あり	30名程度	9月	70%	30%	－
3	Ｊ県教育委員会免許認定講習 聴覚障害者の心理生理病理(領域追加)	53名	12月	42%	58%	62%
4	聴覚支援学校全国オンライン研究会	約590名	2月	17%	83%	－

⑵　オンライン研修の受講経験

オンライン研修の受講経験は表4に示したとおりである。今年度は様々な研修会がオンラインで行われているが、12月まで実施の研修会では、オンライン研修が初めてであるという受講者が多かった（42～70％）。しかし、今年度、初任者研修、中堅教諭等資質向上研修など多くの悉皆研修において数多くのオンライン研修が行われ、規模の大きな特別支援学校では校内の各種打合せ等にもZoomやMeetが活用されていたことは、オンライン研修の経験者を大幅に増やすことに寄与したものと思われる。またギガスクール構想によって1人1台の端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、児童生徒の力を最大限に引き出す教員が、受講する側でなく自ら授業を発信する側へと転換を求められていることも、オンライン授業（研修）の活用が急激に促進されることにつながると考えられる。

表4に示した4の聴覚支援学校全国オンライン研究会は受講者600名弱の同時双方向型・オンデマンド型を併用した大規模な研修会であった。この会は、他の研修会と比べ開催時期が年度末であったこと、PC操作に詳しい担当者が学校代表となって研修会に接続（参加）してきたため「オンライン研修の経験者あり」という解答が特に多くなったと思われる。

今後は「オンラインによる研修を受講したことがあるか」というアンケート項目は不要になってくると考えられる。少なくともこれから教員を目指す学生らは、今年1年間、オンライン授業（研修）を経験し、同時双方向型、オンデマンド型のメリット、デメリットを体感しており、それらを踏まえた上で、授業づくりを進めて行くことになる。

⑶　オンライン研修によって得られる成果

研修受講者に対してオンライン研修と対面研修によって得られる成果の違いを３つの研修会で尋ねた。結果は表５のとおりであった。

表５　オンライン研修と対面研修の成果について

	Ｂ県認定講習	Ｊ県認定講習	全国オンライン研究会
対面で講習を受けた方が成果が上がると思う	6(17%)	0(0%)	7(29%)
オンライン講習のほうが成果が上がると思う	16(46%)	5(16%)	5(21%)
どちらも研修成果は変わらないと思う	13(37%)	19(59%)	10(42%)
どちらとも言えない	0(0%)	8(25%)	2(8%)

オンライン研修によって得られる成果は、配信の状況によっても左右されると考えられる。内容面で満足度が高いものであっても、研修会の半分ほどの時間が、うまく接続できない状況では「成果が上がる」という評価は得られない。

アンケートでは「オンラインのほうが、成果が上がる」「どちらも研修成果は変わらない」という、オンライン研修を好意的に見ているものが６割以上いた。

そう答えた理由を自由記述欄から拾ってみると、以下のような意見が見られた。

・本来は対面がよいが会場までの移動時間、旅費を考えるとオンライン開催の方がよい
・(幼い我が）子の面倒を見ながら研修を受けることができる
・自宅の方が落ち着いて受講できる
・オンラインであれば、見返すこともできるし、遠方でも気軽に参加できる
・受ける側に学びたい気持ちがあれば、どの方法でも成果は同じだと思う
・オンデマンド配信の映像だと、動画を止めたり戻したりしながら視聴ができる。そのため、気になったところを繰り返し視聴したり、聴きながら分からなかったことを他のデバイスで調べたりすることができ、自分なりに学びが深められる気がする
・オンライン（特に録画）は繰り返し再生できるメリットがある
・三密を避け、会場を複数に分けて視聴したが、同僚との視聴なので、合間や終了後に感想などを言い合うことができ、研修を深めることができた
・もしも、これが対面での講演会であったならば、旅費や授業のことを考えて申し込まなかったと思う。

参加者の意見は表６のとおり、必ずしも「対面よりオンラインの方が、成果が上がる」と

考えているのではなく、どちらにも良い点、課題はあるがオンラインならではの利点を見つけて参加している様子がうかがえる。今後オンライン研修を行う際にも、これらのことを踏まえ、対面研修とオンライン研修両方の良さを活かした研修の計画が必要であると考えられる。

表6　オンライン研修についての自由記述

オンライン研修受講者の自由記述の感想（研修の内容に関するものは除く）
■事前にデータを頂けたことで隙間時間に見ることが出来た。昼食を取りながら視聴できたためよかった。
■一時停止や、繰り返し同じ場面を見たりなど、自分のタイミングで見ることができたので良かった。
■動画を見る時間を確保していただいたので、とてもやりやすかったです。また、Wifiの環境があまりよくない状況での受講だったので、もしかすると固まってたかもしれないことを考えると、Zoomと動画を分けていただけてよかった。
■Zoom使用も含めて、オンラインの場合、スマホは不向きです。バッテリーが熱くなるし、画面も小さいので見づらいからです。誰もがPCやタブレットを持っているわけではないので、画面共有などスライドの文字数など対面講義以上に工夫が必要と感じでいます。
■動画を事前に頂けると何回も見直せる。研修の場面のみの視聴だと見逃す部分がでてくる。
■動画を見るときにズームの画面を気にしなくて良かったし、Wifiもスムーズに繋がったため受けやすかった。
■長い研修時間なので、個人的には、研修時間内に動画が入ってくれた方が集中できた。
■別の研修会でZoom経由の動画が途中で止まる等見れないということがあったため、個々が視聴するという形は良かったです。
■動画が事前配布だったので、動作確認ができて良かった。また、うちの町はネット環境が悪いので、同時配信だとしたら、上手く受信できなかった気がしました。
■オンライン方式の操作に自信がないのと、事前に動画を見ることができ講義の内容がイメージできたのが良かったです。
■学期末の忙しい時期にA市で実施されるとなると、遠方のため、受講に足踏みしてしまうところだがオンライン実施で参加しやすかった。
■ビデオ視聴は、昼食をとりながらでしたが、一緒に食事中の我が子供たちにとっても興味深かったようで、あれこれ言いながら視聴できたのが通常の研修ではないことで、不思議で楽しい時間でした。
■”ここは対面講習だとグループ討議にしているところですけど飛ばします”という部分がありましたが、Zoomでもアウトブレイク機能を使えばグループ討議が出来たと思う
■開始時間前のかなり前からミーティングを開始してくださったことでスムーズに講習を受けることができた。
■事前に資料をいただけたので、直接資料への書き込みをしながら学ぶことができた。
■今日は大雪だったので、Zoomで本当に良かったです。また、次回もZoomでの研修会を希望します。
■対面講習だと、A市まで行くのに4時間かかったり、泊を伴うことで育児を夫や母に頼まなくてはいけなかったりするため、このようなオンライン研修だと時間を有効に使えてとても良い
■対面でもマイクを通した声だと同じなのですが、機械音は頭にのこりづらい。

5. おわりに

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、予期せず対面での授業や研修会がなくなり、オンラインでの対応を求められることになった。撮影や編集のテクニカルスタッフがいるわけではなく、授業者は授業・講義を行うことに加え、それを画面の向こうの相手に届

けるという工夫が必要になった。動画作成においては、私のみならず、誰もが、編集・字幕挿入ソフトなどを駆使した授業・講義づくりになった。

このことにより、改めて以下のような「分かりやすい授業（講義）づくり」の視点に気付くことができた。

・パワーポイントのスライドの文字の大きさ・分量
・字幕や説明している様子の動画を挿入するために空白にすべきスライドの領域
・録音時のマイクの使い方
・一行あたりの適切な文字数を考慮した字幕
・適切な講義時間、話・活動のバランス　等

しかし、今年度はこれらのことを走りながら行ったに過ぎず、ここでまとめたことは、筆者個人の経験則に留まっている。今後もオンラインによる講義配信は、続き、今度は質が求められるようになると考えられる。寄せられたアンケートの結果を踏まえ、さらに充実した研修が提供できるようにしていきたい。

参考文献

大西孝志（2020）Webを活用した「教員研修システム」の構築　渡部信一編著　AI時代の教師・授業・生きる力　ミネルヴァ書房，47-83.

文部科学省資料（2020）「大学における多様なメディアを高度に利用した授業について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/__icsFiles/afieldfile/2018/09/10/1409011_6.pdf（最終閲覧日2021年1月11日）

文部科学省（2020）通知「令和2年度における大学等の授業の開始等について」https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf（最終閲覧日2020年12月20日）

国立情報学研究所（2020）データダイエットへの協力のお願い：遠隔授業を主催される先生へ　https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/tips.html（最終閲覧日2020年12月12日）

リーフレット　ギガスクール構想の実現　一人一台末端は令和の学びの「スタンダード」 https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf（最終閲覧日2020年12月12日）